



こんなときでも と こんなときだからこそ

園長 野中 泉

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言が続いていたこの間、私たちは「不要不急」の行動を自粛し、保育園は「やむを得ない事情」から保育を必要とする家庭のために保育を続けてきました。それは同時に、人間の暮らしにとつての「不要不急」と「やむを得ない」はどんなことかを仲間と一緒に葛藤の中で考え続ける期間でもありました。

自粛期間の半ば頃、こんな出来事がありました。子どもの体調不良をめぐって担任と保護者が少しギクシャクし、その数回のやりとりの中で保護者が小さな嘘をついていたことが発覚したのです。「世の中がこんな大変なときに、嘘ついたりごまかしたりするなんて、信じられへん」休憩室で憤慨する担任。彼女がずっと親身にやりとりを続けてきたことを誰もが知っていたため彼女の残念で憤慨する気持ちは、みんなが痛いほどわかるころでした。「でも、うそつかなあかんくらい、しんどかったってことかもしれんよね・・・」と明子さん（林）がポツリと言いました。主任の亀ちゃん（亀地）が「今までだって、弱音を吐けずに、ごまかす人はいっぱいいたよな」と続けました。瞬間みんなで黙ってしまったのは、その次に「いつもはわかってあげられるけど、今は、違う」「ルールはルール。他のみんなは、がんばってるやん」という言葉を飲み込んだからかもしれません。もちろん、目の前で困っている人に手を差し伸べないような職員はアトムにはいません。でも、「困っているの物差し」はひとりひとり違うという当たり前の感覚が、この間コロナという大義名分とセットで語られた「やむを得ない事情」や「不要不急」という言葉に覆われて、揺らぎそうになったことは否定できません。そして同時に、この日のことをはじめとする、この期間のいくつものやりとりの最中の葛藤を、「アトムが大事にしてきたことは何か」、「信頼関係が必要」というような『きれいごと』の言葉で片付けてしまえば、それもまた、私たちの「ほんとうの思い」とは遠く離れてしまう気がしています。

数日後、その場にいたひとりの保育士が、命に関わるコロナと共にある今は、これまでと同じとは言えないのではと迷い結論が出ませんとしながらも、私宛の手紙にこんなことを書いてくれました。

「私もかつてアトムの保護者だった。保護者時代、子育てがしんどくて仕事が休みの日に仕事だと嘘をついてアトムに子どもを預けたこともある。その職員はきっと私の嘘に気づいていたであろうが、何も言わずに子どもを迎え入れてくれた。そんな職員やアトムに何度も助けられた自分だったので、今度は保育士として、そんな保護者のしんどさを理解し、支える保育士でありたいと日々思っている」。

命を守るルールやコロナへの危機感を不要だと言っているわけではありません。私は、この2か月間、仕事以外で出かけた回数は、日常の買い物を入れてもきつと5回に満たない。私だけではなく、この間保育園を閉めるわけにはいかないと頑張ってきた真面目な保育士たちは、離れて住む家族に会いに行くことはもちろん、ごく親しい少数の友人と集まることも日用品以外の買い物に行くことも控え、体調管理には普段の何倍も気をつけてきました。でも、それでも、私たちが向き合っているアトムの仕事は、こんな時でも、世の中の一律のルールや、社会全体の正しさの側から考えるだけでは答えが見つからず、どうしようもなく『はみだしてしまう』出来事の連続なのだ、私たちはその度に悩みもがきながら気づかざるを得ませんでした。

コロナウイルスは、今まで出会ったことのない形で集団感染の怖さをもたらしましたが、同時に「コロナの傘」で目隠しされて、当たり前のことが見えなくなる怖さをもたらしました。残念ながら、自粛期間が解除された6月から、コロナとのつきあいをゼロにすることは難しそうです。きっと、明日からも、判断に迷い、すっきりとは答えが出ずに悩み葛藤することの連続が続くのだと予想されます。でも、それでも、アトムでの毎日は「世の中」や「コロナの傘」の隙間からのぞくのではなく、『はみだしてしまう』目の前の苦しいひとりの側から見つめ続けることをあきらめたくない、そう思っています。